研究報告

# サポートブックを用いた乳がん患者とその子どもへの支援の検討
## －母親の特徴を手がかりに－

野口絵理奈[1,2]，牧野智恵[1§]，松本友梨子[3]，加藤亜妃子[4]，
高山清敏[1,2]，我妻孝則[5]，北本福美[5]

**概　要**

本研究の目的は，乳がん患者とその子どもによるサポートブック作成プロセスにおける母親の記述内容と親子の対話内容の特徴を明らかにし，サポートブックの効果を考察することである．研究対象は乳がん患者とその子どもを支援する『おやこのたのしいじかん』に参加した6組の親子が作成したサポートブックの内容のうち，母親の記述と作成プロセスにおける会話内容である．データを質的帰納的に分析した結果，母親のサポートブックにおける記述内容の特徴として【子どもの良いところを認める】【子ども・家族への感謝の気持ち】など7のカテゴリーと，親子の対話の特徴として『回答をきっかけに会話を楽しんでいる』『子どもが思う意外な親の姿を発見する』など9のカテゴリーが抽出された．親子が一緒にサポートブックを作成することの効果として，がん治療期の母親が子どもから感謝の気持ちを直接聞いたり，子どもの意外な思いやりの気持ちが聞けたことは，早期からの緩和ケアに繋がることが示唆された．

**キーワード**　サポートブック，乳がん患者，親子への支援，家族ケア

### 1．はじめに

日本における乳がんによる死亡者数は，昭和40年代から上昇しており，平成22年度の乳がんによる死亡者数は1万2455人である[1)]．また，部位別にみた悪性新生物の年齢調整死亡率の推移をみると，平成22年には乳がんは第2位であり[1)]，罹患率・死亡率ともに増加傾向にある．乳がんの好発年齢は30～50歳代の子育て世代であり，初発治療後5～10年という長い経過を経て再発・転移が生じる恐れがあり，長期・継続的な治療が必要となる[2)]．そのため，子どもをもつ乳がん患者には，身体的変化・治療・予後・生活への不安など母親自身の問題に加え，化学療法等の副作用による家事・育児への支障，病気により他者との付き合いに制限が生じ，子どもに影響が出たことに申し訳なさを感じるといった子どもへの負担感が生じるなど，母親役割の遂行に困難が生じていることが報告されている[3,4)]．

しかし一方で，乳がん患者のQOLに家族との関係が大きく影響するといわれており，子どもの存在や，子どもから病気の理解を得ることができたことが力となっているといったように，子どもの存在が病気や治療に伴う困難への対処に大きな影響を与えていることが報告されている[2,5)]．このことから，乳がん患者とその子どもをはじめとした家族に対して，家族の絆が深まるような支援が求められている[2,4,6)]．

近年，乳がんの母親とその子どもへのサポートがアメリカや日本で行われている．しかし，これらの活動や介入は親子を別々にサポートするものが多く，親子そろって支援する体制はほとんどみられていない．しかし，近年わが国においてなされているがん患者とその子どもに対する支援の1つに，絵本「サポートブック」[7)]がある．この絵本は，親子の絆を深めるツールとして2008年に中国地方で発刊され，その後全国に広まったが，有効性に関する研究は十分になされていない．

このような背景のもと，本学の牧野研究班（科学研究助成・基礎研究C）が平成24年8月から乳がん患者とその子どもを一緒に支援するプログラムである『おやこのたのしいじかん』を実施した．

[1] 石川県立看護大学
[2] 金沢大学附属病院（現所属）
[3] 福井県済生会病院
[4] 名古屋市立大学
[5] 金沢医科大学附属病院
[§] 責任著者

本研究では，このプログラムの中でのサポートブック作成中の母親の記述内容と，親子の対話内容の特徴を明らかにし，サポートブックの効果を考察することを目的とした．本研究結果より，今後の乳がん患者とその子どもの支援方法を検討していくための一助としたい．

## 2．研究方法

### 2．1　研究対象

本研究では，乳がん患者とその子どもを支援するプログラムである『おやこのたのしいじかん』に参加し，研究協力に同意が得られた親子の，サポートブック作成時の母親の記述内容と対話内容を研究対象とした．なお，今回のプログラムで対象とした母親は，乳房温存術または切除術を受け，現在通院治療中の乳がん患者とした．

### 2．2　実施施設

A 県内の乳腺外来をもつクリニック

### 2．3　実施日

平成 24 年 8 月 4 日（土），9 月 1 日（土）

### 2．4　データ収集方法

（1）親子で「サポートブック」を作成してもらった（約 40 分間）．サポートブックは，全てのページに動物のイラストが描かれ，「（子どもの）なまえのゆらい」「（子ども）がうまれた日はどんな日だった」「はじめてあったときのきもちは」「おとうさん，おかあさんからみて（子ども）のすきなところは」など 20 項目の質問が書かれたページと自由記載のページからなるが，今回は時間の都合上 20 項目のうち 15 項目を指定し記載してもらった．また，今回既存の項目に加え，母親（子ども）が改めて発見したこと，母親（子ども）へのメッセージ，母親（子ども）の現在の気持ち，母親（子ども）が企画後 1 ヵ月間の心に残った出来事や感じたことを問う項目を追加した．

（2）録音の承諾が得られた親子のサポートブック作成中の会話を IC レコーダーに録音した．

### 2．5　データ分析方法

（1）サポートブックの記述内容の分析：サポートブックの母親の記述内容から，意味内容の類似性をもとに分類し，カテゴリーを形成した．

（2）サポートブック作成時の親子の対話の分析：親子の会話内容の逐語録から，子どもとどのような対話をしているのかについて，母親の発言の特性を中心に抽出し，意味内容の類似性をもとに分類し，カテゴリーを形成した．

### 2．6　倫理的配慮

本研究の実施にあたり，本学及び実施施設の研究倫理委員会の承諾を得た（看大第 1283 号）．

参加した母親に研究の主旨と倫理的配慮等（研究に参加しなくても不利益を被らないこと，研究参加中止の自由，プライバシーの保護，得られたデータは本研究の目的以外に用いることはないこと，テープなどは研究者が責任をもって保管することなど）を文書にて説明した．また，何らかの異常がみられた場合は，直ちに同席している医師や看護師等の専門家と連携をとれる体制を整えて実施した．

## 3．結果

### 3．1　対象者の概要（表 1）

今回参加した母親は 6 名であった．

### 3．2　母親のサポートブックにおける記述内容の特徴（表 2）

分析の結果，母親のサポートブックにおける記述内容の特徴として，7 のカテゴリーと 21 のサ

表 1　対象者の概要

| | 母親の概要 | | | | | 子どもの年齢・性別 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 年齢 | 職業 | これまでに受けた治療 | 現在の治療内容 | 診断時期 | | |
| A | 40 歳代前半 | 看護師（パート） | 乳房温存術,放射線療法 | ホルモン療法 | 2 年 1 ヵ月前 | a | 次男（7 歳） |
| B | 30 歳代後半 | 主婦 | 乳房温存術,術前化学療法 | 術後化学療法，放射線療法 | 8 ヵ月前 | b | 長女（7 歳），次女（2 歳） |
| C | 40 歳代前半 | 保育士（フル） | 乳房切除術,放射線療法 | ホルモン療法 | 1 年 9 ヵ月前 | c | 長女（7 歳），次男（3 歳） |
| D | 30 歳代前半 | 美容師（パート） | 乳房温存術,術前化学療法 | ホルモン療法 | 11 ヵ月前 | d | 長男（4 歳） |
| E | 30 歳代後半 | 教員（休職中） | 乳房切除術 | 術後化学療法 | 1 年 1 ヵ月前 | e | 長女（4 歳） |
| F | 50 歳代前半 | 事務職（フル） | 乳房温存術,術後化学療法 | ホルモン療法 | 11 年 0 ヵ月前 | f | 次女（22 歳） |

表２　母親のサポートブックにおける記述内容の特徴

| カテゴリー | サブカテゴリー | 内容 |
|---|---|---|
| 1)【子どもの誕生時の幸福感の想起】 | 《初心に戻り子どもに込めた願いの想起》 | 「良いことがたくさんあるように．気持ちも生活もゆたかであるように」 |
| | 《家族みんなが子どもの誕生を待ち望んでいたことの想起》 | 「家族皆が待ちに待った素敵な日．パパがはじめ“c た”とつけようとしていてお腹の中にいた時から c たと呼んでいた…」 |
| | 《子どもの誕生の喜び・嬉しさの想起》 | 「とてもかわいくて，へその緒は自分で切りました」 |
| 2)【親が童心に戻る】 | 《親が子どもの頃の夢を想起しわが子に伝える》 | 「おかあさんは…人前でははずかしくてしゃべれないけど家ではよくお話する子だったそうです．大人になったら女優！！」 |
| 3)【子どもの良いところを認める】 | 《明るく元気な子どもの姿を肯定する思い》 | 「お母さんは，a がいつも元気で学校に行くときのニコニコ顔が好き」 |
| | 《努力・挑戦する子どもの姿を肯定する思い》 | 「何でも一生懸命やる努力家さんのところ．なんでもやってみようとすること」 |
| | 《わが子と家族との共通点を改めて見直す》 | 「集中すると聞こえない．人を笑わそうとする．おだてられたら逆にやらない」 |
| | 《プログラムで発見した子どもの成長を褒める》 | 「たくさんのひとのまえでもはずかしいのに“ありがとう”とちゃんといえたこと」 |
| | 《プログラムで発見した子どもの母親への優しさ・真剣な姿への喜び》 | 「お母さんのためにいっしょうけんめいがっきをえらんでくれました」<br>「b が意外と真剣にメッセージを書いてくれて，嬉しかったよ」 |
| 4)【子ども・家族への感謝の気持ち】 | 《日々の生活の楽しさの再認識》 | 「まいにちがたのしいです」 |
| | 《子ども・家族からの協力・支えへの感謝》 | 「じいちゃんが亡くなったことで，改めてみんなの心の優しさ，みんなの存在が大きく感じられました．みんな心の優しい子に育ってくれてありがとう」 |
| | 《プログラム参加後 1 ヵ月間の子どもの様子から成長を感じ感謝》 | 「最近よくお手伝いをしてくれるようになりました．妹のめんどうもけんかをしながらもよくみてくれて助かってます」 |
| 5)【子どもの成長に込める願い・期待】 | 《その子らしく元気に成長してほしい気持ち》 | 「まい日たくさんあそんで元気にすごしてね」「大好きな歌もたくさん聞かせてね」 |
| | 《母親として子どもへの気がかりな気持ち》 | 「食べ物の好き嫌いがあったり，少ししか食べないときは心配ですが…」 |
| | 《近い将来の子どもへの成長への願い》 | 12 才になった子へのメッセージ<br>「今まで以上に友達とのかかわりが増え，自分で考えることもいっぱいです．なやみもいっぱいです．お母さんの中学のときの友達は大人になってもつきあっていける一生の友達です．なやんだら友達に相談してきっといいことがある．それでも解決できなければお母さん，お父さん，おばあちゃん，おじいちゃんもいます．わすれないでね．いつも a の一番いいことを願っているよ．お兄ちゃん，お姉ちゃんもみんな a のことを助けるよ」 |
| | 《遠い将来の子どもへ乳がんへのアドバイス》 | 20 才になった子へのメッセージ<br>「お母さんは乳がんになりました．必ずしも遺伝するわけでないけれど乳ガンになる確率は他の人よりも高いということを忘れないでほしいです．お母さんの母親，つまりあなたのおばあちゃんも乳ガンになっています．だからお母さんも心のどこかで乳ガンになるのではないかと思っていました．発症したのが思ったより早かったですが，(38 才で発症)だから少しショックを受けたけど，全く考えていない状態よりはショックの度合いが違ったかな．怖がる必要はありません．しっかりした知識と定期検診(マンモグラフィーなど)をきちんとしていれば大丈夫です．発見が早ければ早いほど良いからです．ガンが見つかったら落ち込むよりもどうやってガンと付き合っていくか考えてね．どんどん医学が発達していて良いお薬もたくさん出てくるだろうから，乳ガン＝死では決してないから安心してください．正しい知識を早いうちから得ることが大事だからね」 |
| 6)【これからの生活を家族と共に大切に送りたい気持ち】 | 《子どもと一緒に過ごす時間を大切に思う気持ち》 | 「今は妹が幼いので常に三人だけど，二人きりの時間がお母さんと b にはもう少し必要だなと思います」 |
| | 《家族と共に前向きに楽しく生活したい気持ち》 | 「これからもこんな感じで助け合う D 家を守っていきたいと思います」<br>「これから家族仲良く，たくさん思い出をつくりましょう」<br>「これからも一日一日を大切に e や家族と楽しく過ごせたら良いなと思います」 |
| | 《兄弟を大切にしてほしい願い》 | 「これからも二人仲良くね/お兄ちゃんとおとうとにやさしくして，なかよくね」 |
| 7)【プログラムへの思い】 | 《子どもとゆっくり時間を共有できたことへの幸福感》 | 「毎日忙しくすぎていき，今日はやさしい時間をもつことができました」<br>「こんなじかんはなかなかつくれないので，この絵本を一生の宝物にしたいです！」<br>「なかなかゆっくり二人で過ごすことがないので，この『おやこのたのしいじかん』に参加できて良かったです．またこのような機会があれば良いなと思います」 |
| | 《サポートブックの有効性を感じ他の親子に勧める》 | 「他に残された時間の少ない方が参加されることも望みます．そして特別な親子というのではなく普通の楽しい時間を共有できると幸せだと思います」 |

ブカテゴリーが抽出された．以下【】内はカテゴリー，《》内はサブカテゴリー，「」内は記述内容を示す．

（1）【子どもの誕生時の幸福感の想起】

このカテゴリーは，子どもの名前の由来や子どもの誕生にあたっての家族の気持ちの想起を通して幸福感の想起に至っていることを表していた．《初心に戻り子どもに込めた願いの想起》《家族みんなが子どもの誕生を持ち望んでいたことの想起》《子どもの誕生の喜び・嬉しさの想起》のサブカテゴリーが含まれていた．

（2）【親が童心に戻る】

このカテゴリーは，幼少期の父・母親自身の姿や，夢や宝物を想起し，わが子に伝えることで母親が童心に戻っていることを表している．《親が子どもの頃の夢を想起しわが子に伝える》のサブカテゴリーがあった．

（3）【子どもの良いところを認める】

このカテゴリーは，子どもを改めて見直すことや，今回のプログラム中の子どもの様子をみることから子どもの良さを実感し、褒めている様子を示している．これには《明るく元気な子どもの姿を肯定する思い》《努力・挑戦する子どもの姿を肯定する思い》《わが子と家族との共通点を改めて見直す》と，《プログラムで発見した子どもの成長を褒める》《プログラムで発見した子どもの母親への優しさ・真剣な姿への喜び》のサブカテゴリーがあった．

《プログラムで発見した子どもの成長を褒める》では，「たくさんのひとのまえでもはずかしいのに“ありがとう”とちゃんといえたこと」という記述があった．これは，プログラム開始前に泣きながら会場に入ることを拒んでいた子どもが，プログラム導入の音楽を通して落ち着き，当日が誕生日であったことから参加者全員で歌のプレゼントをしたところ，ありがとうと人前で話せていた子どもの様子から，母親が子どもの成長を感じたことを表している．

（4）【子ども・家族への感謝の気持ち】

このカテゴリーは，これまでの生活やプログラム参加後１ヵ月間を振り返る中で抱いた子どもや家族への感謝の気持ちを表している．《日々の生活の楽しさの再認識》《子ども・家族からの協力・支えへの感謝》《プログラム参加後１ヵ月間の子どもの様子から成長を感じ感謝》のサブカテゴリーがあった．

《子ども･家族からの協力･支えへの感謝》では，「じいちゃんが亡くなったことで，改めて，みんなの心の優しさ，みんなの存在が大きく感じられました．みんな心の優しい子に育ってくれてありがとう」など，これまで協力・支えてくれた子ども・家族への感謝の気持ちが記述されている．

《プログラム参加後１ヵ月間の子どもの様子から成長を感じ感謝》では，「最近よくお手伝いをしてくれるようになりました．妹のめんどうもけんかをしながらもよくみてくれて助かってます」と，子どもの変化・成長を感じると同時に，感謝の気持ちを表す記述がみられた．

（5）【子どもの成長に込める願い・期待】

このカテゴリーは，現在・将来の子どもの成長への願いを表している．《その子らしく元気に成長してほしい気持ち》《母親として子どもへの気がかりな気持ち》《近い将来の子どもへの成長の願い》《遠い将来の子どもへ乳がんへのアドバイス》のサブカテゴリーがあった．

《その子らしく元気に成長してほしい気持ち》では，「まい日たくさんあそんで元気にすごしてね」など，子どもらしく・その子らしさを大切にして子どもの成長を願う記述がみられた．

《母親として子どもへの気がかりな気持ち》では，「食べ物の好き嫌いがあったり，少ししか食べないときは心配ですが…」と，子どもへの気がかりな思いがみられた．

《近い将来の子どもへの成長の願い》では，中学校入学という節目を迎えた子どもに対し「…なやんだら友達に相談してきっといいことがある…それでも解決できなければお母さん，お父さん，おばあちゃん，おじいちゃんもいます．わすれないでね．いつもａの一番いいことを願っているよ．…みんなａのことを助けるよ」と，近い将来の子どもへ伝えている．

《遠い将来の子どもへ乳がんへのアドバイス》では，20歳を迎える子どもに向けて「お母さんは乳がんになりました…しっかりとした知識と定期検診…をきちんとしていれば大丈夫です．ガンが見つかったら落ち込むよりもどうやってガンと付き合っていくか考えてね．乳がん＝死では決してないから安心してください．正しい知識を早いうちから得ることが大事だからね」と，母親が自身の体験を通して子どもへのメッセージが記述されていた．

（6）【これからの生活を家族と共に大切に送りたい気持ち】

このカテゴリーは、これまでの生活を振り返り，

子どもと過ごす時間の大切さを再認識していること，これからの生活を家族で協力して過ごしていきたいという思い表している．また，兄弟がいる子どもに対し，兄弟を大切に思う気持ちを持っていてほしいことを示している．《子どもと一緒に過ごす時間を大切に思う気持ち》《家族と共に前向きに楽しく生活したい気持ち》《兄弟を大切にしてほしい願い》のサブカテゴリーがあった．

（7）【プログラムへの思い】

このカテゴリーは，『おやこのたのしいじかん』に参加したことで感じた幸福感や他の親子に勧めたい気持ちを表している．《子どもとゆっくり時間を共有できたことへの幸福感》《サポートブックの有効性を感じ他の親子に勧める》のサブカテゴリーがあった．

### ３．３　サポートブック作成時の親子の対話の特徴

サポートブック作成時の、親子の会話内容の逐語録を分析した結果，対話の特徴として９のカテゴリーが抽出された．以後〖〗内はカテゴリー,「」内は語りを示す（表３）．

（1）〖子どもの思いを具体的に聞こう・引き出そうと声を掛けている〗

このカテゴリーは，母親が子どもの思いを聞こうと「だけど？」「どうして行ってみたい？」などと声掛けを行っていることを表している．

（2）〖書かれている回答を子どもに分かりやすく声に出して伝えている〗

このカテゴリーは，サポートブックに書き込むだけでなく，回答内容を声に出して子どもに伝えていることを表している．

（3）〖回答をきっかけに会話を楽しんでいる〗

このカテゴリーは、サポートブックへの回答を機に親子の会話が弾む様子や，子どもなりに設問に答える様子に母親が戸惑いながらも会話を楽しんでいる様子、回答内容を親子で確認し合う様子を表している．

（4）〖子どもの疑問にひとつひとつ丁寧に答えている〗

このカテゴリーは、サポートブックの設問の意図の理解が難しいなどの理由から生じる子どもの疑問に対し，母親は嫌がることなく，疑問が解けるまでひとつひとつ丁寧に答えている様子を表している．

（5）〖回答について母親が誘導する〗

このカテゴリーは，母親の言葉が子どもの回答を誘導するかたちとなっていたことを表している．

（6）〖今回のプログラム内での子どもの様子を褒める〗

このカテゴリーは，子どもが上手に挨拶できたこと，字を上手に読み書きできたこと，絵を上手に描けたことなど，プログラム内での子どもの様子を褒めていることを表している．

（7）〖子どもが思う意外な親の姿を発見する〗

このカテゴリーは，子どもとの対話や子どもの

表３　サポートブック作成時の親子の対話の特徴

| カテゴリー | 対話の内容 |
|---|---|
| 1)〖子どもの思いを具体的に聞こう・引き出そうと声を掛けている〗 | (子どもがおこりんぼうだけどと書き込む)母:「だけど？」 |
| | 母:「どうして行ってみたい？」 |
| 2)〖書かれている回答を子どもに分かりやすく声に出して伝えている〗 | 母:「いっぱい書いたよ. 読むから聞いて. 7 歳になった d へ. 何でも楽しんだ方が良いよ. 笑ってた方が楽しいよ. OK？」 |
| | 母:「動物に例えたら…犬かな. 人懐っこいから. 人に付いていくもんだって. …可愛いやろ？」 |
| 3)〖回答をきっかけに会話を楽しんでいる〗 | 母:「コアラ」/子:「コアラで良いよ. コアラなら良いわ. コアラ, コアラなら良いわ」/<br>母:「ゴロゴロってパパに着いて行くし」/子:「ふふん(笑い気味)コアラ(笑い気味)」 |
| | 母:「e から今のお母さんにメッセージ. お母さんに何か言いたいことありますか」/<br>子:「ご飯つくって」/母:「ご飯いつもつくっとるじゃん. 今」/…母:「お母さんに何してほしい？」/<br>子:「う～ん. しゃぼん玉」/母:「しゃぼん玉？」/子:「分からんね, 意味が」/…<br>母:「お母さんにこれを言いたいなって, お手紙書いてよ」/…子:「良いよ」 |
| 4)〖子どもの疑問にひとつひとつ丁寧に答えている〗 | 母:「ママのことで新しく発見したこと」/子:「今？」/母:「今日」/…<br>子:「今日？ねえママ, ここで？」/母:「そうそうそう」… |
| 5)〖回答について母親が誘導する〗 | 子:「あるある, したいこと」/母:「ママ, 今勉強したい」/子:「1, 2, 3, 4」/母:「そうそうそう」 |
| 6)〖今回のプログラム内での子どもの様子を褒める〗 | 母:「ママやったら, c が～ね, 挨拶上手にできたのびっくりしたから～, ね」/ |
| | 子:「誰書く？う～ん, d や. 自分」/母:「上手」 |
| 7)〖子どもが思う意外な親の姿を発見する〗 | 子:「ママは, ママは洗濯しとったのが面白かった」 |
| | 子:「洗濯しとるのと, 父ちゃんお仕事行きます」 |
| 8)〖回答内容をきっかけにがん発症時の親子の出来事の話題へと転換する〗 | 母:「行くはずやったやろう. 行けんくなったじゃん. お母さん病気になったで」/子:「がん？」/<br>母:「うん. だって行こうって言ってたときにがんになって行けんくなった. だめやってん」 |
| 9)〖筆記用具や書き方を親子一緒に考える〗 | 母:「動物って習ってないね？漢字が良い？」/子:「まだ習ってない. 漢字が良い」 |
| | 子:「マジックで書いた方が見やすくない？」/母:「ほんとやね. マジック」 |

記述内容から，子どもが日常の両親をどのように見ているかを発見する機会となっていることを表している．

（8）〖回答内容をきっかけにがん発症時の親子の出来事の話題へと転換する〗

このカテゴリーは，行ってみたいところを記述するページにて，以前旅行の計画をしていたが母親の病気をきっかけに行けなくなったことを母親が話したところ，回答内容からがんに関する話題となったことを表している．

（9）〖筆記用具や書き方を親子一緒に考える〗

このカテゴリーは，サポートブックの回答に関する親子の対話とは別に，サポートブックを作る過程において，どの筆記用具で何色を用いて書くか，また漢字で書くかなどの書き方に関する親子の対話があったことを表している．

## 4．考察

サポートブック作成時の母親の記述内容及び親子の対話の特徴から，親子で一緒にサポートブックを作成することの効果，今後サポートブックを用いて親子一緒の支援を実施するにあたっての配慮について考察したい．

### 4．1　親子で一緒にサポートブックを作成することの効果

（1）親子が直接思いを伝え合うことにより親子に良い相互作用が働く

母親は，優しい子に育ってくれたことや，普段子どもが手伝いをしてくれる様子に対し【子ども・家族への感謝の気持ち】として《子ども・家族からの協力･支えへの感謝》《プログラム参加後１ヵ月間の子どもの様子から成長を感じ感謝》などがみられていた．

感謝の気持ちを伝えることは，伝える側・伝えられる側相互の情緒の安定に繋がる[8]といわれている．今回，プログラム中及び１ヵ月後の母親の記述から，母親から感謝の気持ちを伝えられたことが子どものがんばる気持ちや母親を労わる気持ちの強まりに影響していること，また，このような子どもの様子が母親の喜びに繋がっていることが予測される．

また,【子どもの良いところを認める】には,《明るく元気な子どもの姿を肯定する思い》《プログラムで発見した子どもの成長を褒める》などのサブカテゴリーがあった．これらは，普段の子どもの笑顔やプログラム中にあいさつをする様子を認めていることを表している．このような母親の気持ちを子どもに伝えることで，子どもは特別なことではなく，自分らしくいつも通り過ごせば母親が喜んでくれることを感じ取り，母親の言葉が道しるべとなり，母親が病気であっても，その子らしく元気に過ごすことができるのではないかと考える．

乳がんである母親には，心配をかけないために家族を気遣う[9]，闘病生活が子どもに与える影響が心配[10]といった，自分の病気による子どもや家族への影響を心配する気持ちがあるといわれている．サポートブックを通した親子の交流によって，子どもが自分らしく普通に過ごすことが母親にとっては嬉しさ，心強さや安心感に繋がることを子どもに伝えることができ，母親の子どもへの気がかりな気持ちの軽減に繋がるのではないかと考える．

（2）早期からの緩和ケアに繋がる

子どもを持つ乳がん患者が闘病の支えとして抱く希望として，親としての責任を果たすといった母親役割の遂行があるといわれている[11]．一方で，母親は病気により行動範囲や他者との付き合いに制限が生じ，子どもにも影響が出たことに申し訳なさを感じるといった子どもへの負担感を感じていたり[3]，子どもの世話が十分にできない[10]という悩みがあるともいわれている．また，母親ががんであることを子どもに伝えられないなどの，病気のことを子どもと話すことに難しさを感じている母親がいることも報告されている[3]．

今回，親子の対話の特徴として〖回答をきっかけに会話を楽しんでいる〗〖子どもが思う意外な親の姿を発見する〗があり，子どもが普段の母親をどのように見ているのかを知る機会となっていた．また，記述内容の特徴である【これからの生活を家族と共に大切に送りたい気持ち】として《家族と共に前向きに楽しく生活したい気持ち》があった．これらのことから，今回のプログラムにおける子どもとの対話などを通して，母親が日常生活を営むために行っている普段の役割をこなすことが，子どもには母親として認識されている，といった子どもから見た母親像を知ることができたことは，母親としての役割遂行ができているのだという自信や，母親としての存在の再確認に繋がり，母親としてのこれからを前向きに考えるきっかけとなったのではないかと考える．

また，今回【子どもの成長に込める願い･期待】の《遠い将来の子どもへの乳がんへのアドバイ

ス》として「必ずしも遺伝するわけでないけれど乳がんになる確率は他の人よりも高いということを忘れないで…」と記述している母親がいた．乳がんの経験者・母親として，日頃辛さや心配させてしまうことを避けたいという思い[3,12]から面と向かってはなかなか話す機会のない，がんの遺伝性や早期発見の大切さ，乳がんとの向き合い方などをサポートブックに託して書くことで，子どものがん予防への意識に繋げることができ，このこともまた，母親役割の遂行に繋がるのではないかと考える．

他にも，サポートブック作成時の親子の対話の特徴として〖子どもの思いを具体的に聞こう・引き出そうと声を掛けている〗〖書かれている回答を子どもに分かりやすく声に出して伝えている〗〖回答をきっかけに会話を楽しんでいる〗〖子どもの疑問にひとつひとつ丁寧に答えている〗〖今回のプログラム内での子どもの様子を褒める〗などがあった．これらは，親子でゆっくり対話できたこと，その対話を通して子どもの良さを再確認するきっかけとなったことを示しており，このような親子の時間を過ごせたことそのものが，母親役割の遂行に繋がっていることが考えられる．

がんのターミナル期における支援として，言語的・非言語的・情緒的コミュニケーションを交わしながら心の交流を深めることが，より良い生への希望につながり，家族にとってのよい思い出づくりになり[13]，家族の絆の確認・絆を強めるなどといった効果が報告されている．今回の親子を一緒に支援することを目的としたプログラムの対象としたのは，現在も治療中の乳がん患者とその子どもであったが，【プログラムへの思い】では《子どもとゆっくり時間を共有できたことへの幸福感》などの記述がみられた．つまり，今回のプログラムを通して親子の心の交流に繋がり，絆を強めている様子がうかがえる。このように，ターミナル期のみならず早い時期から親子で互いの気持ちを伝え合う機会がもてることは，母親と子どもの双方にとって今後の生活を有意義に過ごすことに繋がるのではないだろうか．

平成24年に見直しがなされた，がん対策基本法に基づくがん対策推進基本計画の重点的に取り組むべき課題の一つに「がんと診断された時からの緩和ケアの推進」[1]とある．がんと診断された早い時期から今回のようなプログラムによって親子で対話することは，母親としてのこれからを前向きに考えるきっかけとなったり，対話そのものが母親役割の遂行に繋がることが考えられ，早期からの緩和ケアの一手段に繋がるのではないかと考える．

### ４．２　サポートブックを用いて親子一緒の支援を実施するにあたっての配慮

今回１組だけであったが，サポートブック作成中の親子の会話に「がん」という言葉が出てきていた．

今回参加した子ども全員が，これまでに母親ががんであることを伝えられていたが，今後場の提供を行うにあたり，親子の対話の中でがんや病気といった言葉が周囲から聞かれる可能性があることへの配慮が必要であると考える．そのため，母親のがんを子どもに知らせていることの有無を確認し，プログラム実施中に突然母親ががんであることを知らせてしまい，親子に衝撃を生じさせることのないよう配慮する必要があると考える．

## ５．結論

本研究は，乳がん患者とその子どもを一緒に支援するプログラム『おやこのたのしいじかん』における，サポートブック作成中の母親の記述内容や親子の対話の特徴を明らかにし，サポートブックの効果を考察することを目的とした．

母親のサポートブックにおける記述内容の特徴として【子どもの誕生時の幸福感の想起】【親が童心に戻る】【子どもの良いところを認める】【子ども・家族への感謝の気持ち】【子どもの成長に込める願い・期待】【これからの生活を家族と共に大切に送りたい気持ち】【プログラムへの思い】の７のカテゴリーが抽出された．

親子の対話の特徴として〖子どもの思いを具体的に聞こう・引き出そうと声を掛けている〗〖書かれている回答を子どもに分かりやすく声に出して伝えている〗〖回答をきっかけに会話を楽しんでいる〗〖子どもの疑問にひとつひとつ丁寧に答えている〗〖回答について母親が誘導する〗〖今回のプログラム内での子どもの様子を褒める〗〖子どもが思う意外な親の姿を発見する〗〖回答内容をきっかけにがん発症時の親子の出来事の話題へと転換する〗〖筆記用具や書き方を親子一緒に考える〗の９のカテゴリーが抽出された．

親子で一緒にサポートブックを作成することの効果として，親子が直接思いを伝え合うことによ

[1] がん対策推進基本計画の概要，厚生労働省ホームページ http://www.mhlw.go.jp

り親子に良い相互作用が働くこと，早期からの緩和ケアに繋がることが示唆された.

**謝辞**

本研究を行うにあたり，ご協力いただきました親子の皆様方，クリニック及び関係者のスタッフの皆様方に心より感謝申し上げます.

本研究は，平成24年度科学研究費助成事業基盤（C）「がん患者とその子どもへの支援プログラムの開発」（研究代表者：牧野智恵；24593316）の助成を受けて行った.

利益相反なし.

**文献**

1）伊藤雅治，他：国民衛生の動向・厚生の指標増刊 58（9）．52 - 53，2011.
2）阿部恭子：乳がん看護困った！にこたえるサポートブック－54の困ったの解決策とポイントがわかる，メディカ出版，18 - 19，2009.
3）内山美枝子，青山友香里：若年性乳がん体験者のライフストーリーからみる治療過程における「子の存在」の意味づけ．日本看護学会論文集（母性看護），126 - 129，2010.
4）山手美和：外来において治療を継続していく乳がん患者の力．日本死の臨床研究会研究助成報告書 2009年度，1 - 5.
5）妹尾未妃：中年期乳がん患者の乳がん罹患後の人生の希望と不安．母性衛生 50（2），334 - 342，2009.
6）藤沼稔：乳がん患者ケアガイド．学習研究社，174 - 175，2006.
7）サポートブック作成プロジェクトチーム（著･編），accototo ふくだとしお＋あきこ（イラスト）：親子をつなぐサポートブック，PHP 研究社，2009.
8）木村たき子，他：「ありがとう療法の試み」－“ありがとう”Letteringの事例研究－．日心第75回大会，436，2011.
9）越塚君江，他：女性生殖器がん患者の家族への思いとそれに対する看護援助．岡山大学医学部保健学科紀要，16，31 - 38，2005.
10）大曲睦恵，石田裕二：成人がん患者の子どもへの支援の中で表出された言語的・非言語的表現内容の検討．日本小児科学会雑誌，116（5），866 - 873，2012.
11）茂木寿江，他：子どもを持つ乳がん患者が抱く希望．The Kitakanto Medical Journal，60（3），235 - 241，2010.
12）佐々木笑：初期治療終了後，外来で治療を受けている乳がん患者の思い．日本赤十字看護大学紀要．22，28-38，2008.
13）戸井間充子，他：ターミナル後期にある家族が思い出づくり」をする意味．看護きろく，12（10），66，2003.

# A Consideration on Support for Breast Cancer Patients and their Children by Using "Support Book" − With the Clue of Characteristics of Mothers −

Erina NOGUCHI, Tomoe MAKINO, Yuriko MATHUMOTO, Akiko KATO, Kiyotoshi TAKAYAMA, Takanori WAGATHUMA, Fukumi KITAMOTO

**Abstract**

The purpose of this study is characterize the characteristics of descriptive contents of breast cancer patients and the conversations between them and their child in the making process of "Support Book (Hereinafter referred to as SB)" , and to examine the effect of SB. In the contents of SB made by six pairs of parent and child who joind in the program called "OYAKONOTANOSHIJIKAN" which supports breast cancer patients and their child, the descriptive contents of mothers (patients) and the conversation between them and their child are the objects of this study.

As a result of analyzing the date qualitative and inductive, seven categories like "Admitting good things about their child", "Gratitude for their child and family" and the like were extracted as the characteristics of the patient's descriptive contents in SB; nine categories such as "Enjoying conversation motivated by responding to the questions in SB" and "Finding out the unexpected parental attitude their child thinks" were extracted as the characteristics of the conversations between parent and child.

AS the effects of making SB by the patients and their child together, it is suggested that hearing the gratitude from their child directly and unexpected feeling of consideration of them during treatment of cancer leads to an early-stage palliative care for patients.

Keywords support book , breast cancer patient , support for parents and children , family care